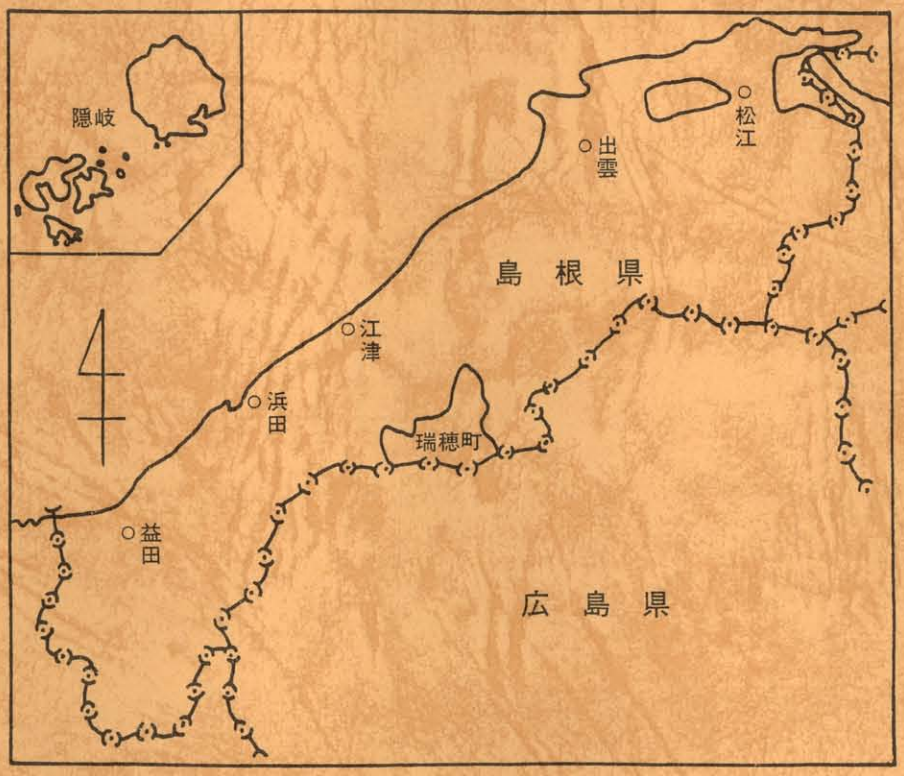
瑞穂町埋蔵文化財調査報告書第19集

島根県邑智郡瑞穂町

赤城跡発掘調査報告書

林道栃谷線新設工事に伴う発掘調査



1996年3月

島根県邑智郡瑞穂町教育委員会

序

瑞穂町には中世の山城跡や砦跡が30有余確認されており、それらの多くは出羽氏や高橋氏に関わる城跡だと伝えられています。しかし、これらの多くは未だその実態が明らかにされておらず築廃城の年代や築城者についても不明であります。

この度調査の報告をさせていただく赤城跡の発掘調査は林道栃谷線新設工事伴うものであります。調査は、工事により影響を受ける限られた部分の調査でありその全容を明らかにすることは出来ませんでしたが、調査の結果をここに報告いたします。今後これらの成果が、中世城跡研究の一助になれば幸いです。

なお、今回の調査でご指導やお力添えをいただきました多くの方々に深甚の謝意を表する次第であります。

平成８年３月

瑞穂町教育委員会

教育長　澤　田　隆　之

例　　言

1．本報告書は平成７年10月17日から10月31日にわたって調査を実施した赤城跡発掘調査の報告書である。

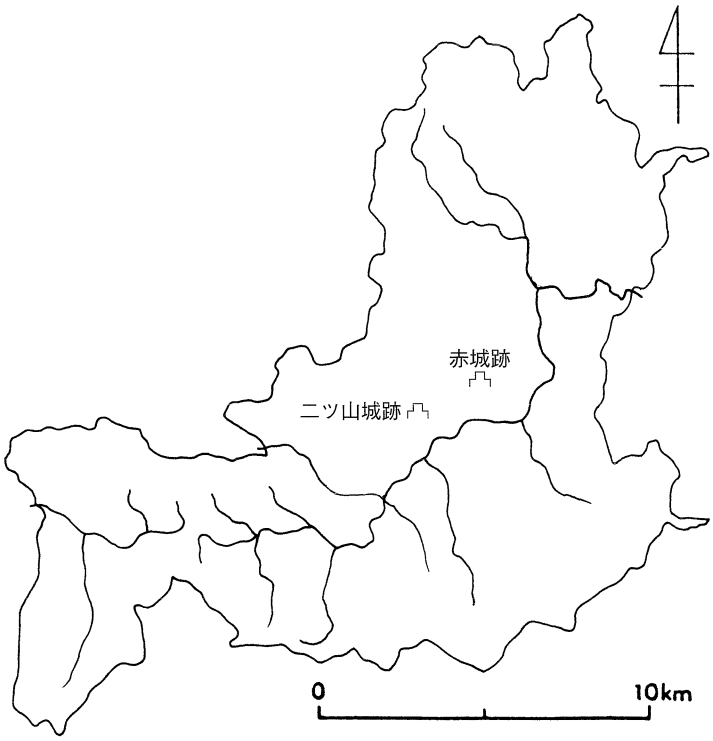
2．赤城跡発掘調査の執筆編集は森岡弘典が行った。

3．本書掲載の図面作成は、赤城跡発掘調査は森岡弘典、藤田睦弘が行った。

4．本書掲載の地形図（第図）は、建設省国土地理院長の承認を得て（承認番号平７中複第276号）同院発行の25000分の１を複製した瑞穂町管内図を使用したものである。

5．本書掲載図面の矢印は磁北を示している。

6．出土遺物、実測図、写真は瑞穂町教育委員会で保管している。



瑞穂町域と赤城跡位置図

島根県邑智郡瑞穂町

赤城跡発掘調査報告書

目　次

序

頁

Ⅰ．調査に至る経緯……1

Ⅱ．赤城跡の位置と環境……2

Ⅲ．調査の概要……4

Ⅳ．まとめ……10

付編Ⅰ

赤城跡放射性炭素年代測定結果報告書（地球科学研究所）……12

図版・挿図目次

図版第１　a. 赤城跡遠景（南東から）　b. 調査前全景（北西から）　c. 同完掘状況（同）

図版第２　a. 完掘状況（南東から）　b. 第１平坦面完掘状況（南西から）　c. 同（北東から）

図版第３　a. 第２平坦面完掘状況（東から）　b. 第３平坦面土砂堆積状況（西から）
c. 第３平坦面完掘状況（東から）

図版第４　a. 第２・第３平坦面完掘状況（東から）　b. 第４平坦面土砂堆積状況（南西から）
c. 同完掘状況（同）

図版第５　a. 第３・第４平坦面完掘状況（西から）　b. 竪堀状遺構完掘状況（北西から）
c. 出土遺物

第１図　赤城跡付近遺跡分布図（1:25000）……3

第２図　発掘調査前地形測量図・調査区設定図……5

第３図　第１・２・３・４平坦面実測図（1:100）……6

第４図　発掘調査後地形測量図（1:100）……7

第５図　竪堀状遺構実測図（1:50）……8

第６図　出土遺物実測図（1:2）……9

第７図　赤城跡縄張図……9

Ⅰ．調査に至る経緯

今回発掘調査を実施した赤城跡は、島根県邑智郡瑞穂町大字上原字大廻331番地外に所在する中世の山城跡である。管見するかぎりでは赤城跡に関する原資料は見当らないが、出羽氏関係の山城跡と伝えられている。ところで、瑞穂町は207.8㎢の面積を有しており、その89.4％を森林が占めている。このため林業活性化を進める上で基盤となる林道整備が急務であり課題である。赤城跡の所在する周囲も人工林や自然林が密生しているが、狭小な山道があるだけで、森林の伐採や植林作業が不可能であった。このため土地所有者から町へ対して林道開設の陳情が度々なされ、馬野原集落から上原集落をつなぐ全長4.4kmの林道栃谷線の開設が実施されることとなった。昭和63年より馬野原集落側を起点に逐次工事が実施されてきたが、起点から約2.5kmの地点で赤城跡の主郭部から派生する尾根上に小規模な平坦面が４ケ所確認された。この取扱いについて島根県教育委員会文化課や瑞穂町開発課と協議を重ねたが、道路の変更は地形の制約により困難との結論に達し、林道建設予定地内について発掘調査を実施する事となった。

調査は平成７年10月17日から10月31日にわたり次ぎの体制で実施した。

調査主体　瑞穂町教育委員会

調　査　員　森岡　弘典（瑞穂町教育委員会文化財係長）
　　藤田　睦弘（瑞穂町教育委員会主任主事）

調査指導　吉川　　正（島根県文化財保護指導委員）
　　川原　和人（島根県教育委員会文化課主幹）
　　今岡　一三（島根県教育委員会文化課文化財保護主事）

事　務　局　澤田　隆之（瑞穂町教育委員会教育長）
　　山本　忠徳（瑞穂町教育委員会教育課長）
　　星野　暢子（瑞穂町教育委員会課長補佐）
　　平川　　進（瑞穂町教育委員会課長補佐）

整理作業　市山真由美（瑞穂町教育委員会）

発掘作業員　荒瀬義人、石川義明、今田徳郎、岩根諭、上川義夫、漆谷勉、国信勇之進、佐藤三郎、洲浜軍太郎、高川秀夫、戸津川里美、戸津川孝夫、平川正寅、久光花枝、古川健二、松島利郎、三上喜義、三上覚、三上福三、森田ユキミ

Ⅱ．赤城跡の位置と環境

島根県邑智郡瑞穂町は、島根県のほぼ中央部の邑智郡南部に位置する。南西には標高600～800mの中国脊梁山地が連なり、山地を境として広島県と接している。

この県境に源を発する出羽川は、瑞穂町のほぼ中央を蛇行しながら南西から北東に向かって流れ、その流域には狭小な沖積平野や河岸段丘からなる出羽盆地を形成している。

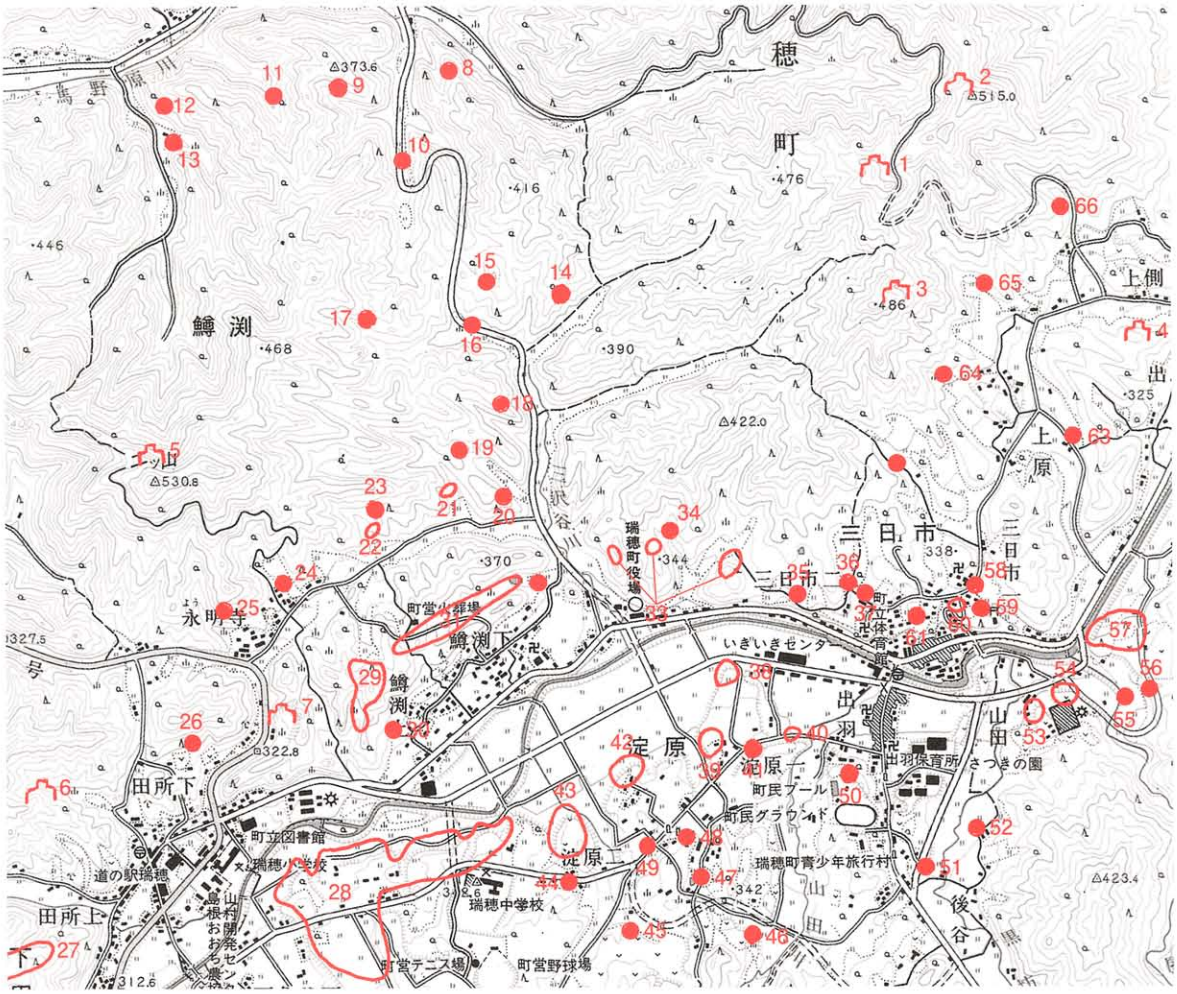
発掘調査の対象となった赤城跡は、上原集落の北西に位置し、出羽氏が築城したと伝えられ[(1)]、標高486mの山頂を中心に10数段の小規模な郭からなる中世の山城である。赤城跡は瑞穂町役場から６kmの距離にあり、役場横の町道鱒淵馬野原線を馬野原地内で林道栃谷線に入り車で10分登ると赤城跡山腹に到着する。急斜面を約５分登ると頂上に至る。頂上からは南西に出羽盆地の一部や南東に上側集落や上和田集落を、西側に町内最大級の規模の二ツ山城跡を望ことができるが、二ツ山城[(2)]跡に比べて眺望は劣る。

ところで、瑞穂町内の遺跡は『島根県遺跡地図Ⅱ（石見編）[(3)]』や『瑞穂町内遺跡分布図[(4)]』によれば、現在のところ約550ケ所確認されている。時期的には旧石器時代から歴史時代に至るまでのものである。歴史時代の遺跡では、古代の須恵器窯跡群や集落跡のほか、中世の山城跡や中近世の製鉄遺跡がある。中世の山城では赤城跡のほか、二ツ山城（鱒淵）、高橋（本城）氏関係の本城跡（下田所）、別当城跡（和田）、琢道城跡[(5)]（高見）、吉川氏関係の桜尾城跡（市木）、福屋・周布氏関係の高城跡[(6)]（市木）等多くの山城が確認されている。その他にも山城跡や砦跡と伝えられるものが数ケ所分布している。

つぎに中近世の製鉄遺跡は、製鉄場である鈩跡や大鍛冶場跡が数多く分布する。その数は300ケ所以上に及び今後調査が進めば500ケ所越えると推定さる。また、砂鉄採集の鉄穴場跡、切羽跡は瑞穂町全域に分布しており、製鉄が盛んに行われていたことがうかがわれる。その良質な鉄資源を背景に、中世から近世にかけて多くの刀工が存在していたことが知られている。その中には相州正宗十哲の一人と伝えられる、初代出羽直綱など著名な刀工も輩出している。また、豊富な鉄資源は刀工のみならず、在地豪族にも大きな魅力であり群雄割拠する豪族が鉄をめぐる争奪を繰り返していたことも想像に難しくない。近世になると「出羽鋼」と呼ばれる良質な鋼を算出し全国に供給していたことが知られている。

註

(1) 瑞穂町教育委員会「瑞穂町誌」第１集　1964年。
(2) 前掲註(1)。
(3) 島根県教育委員会「島根県遺跡地図（石見編）」 1992年３月。
(4) 瑞穂町教育委員会「瑞穂町遺跡分布図Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ」 1985・1986・1990・1991・1992年。
(5) 瑞穂町教育委員会「琢道城跡発掘調査報告書」 1992年３月。
(6) 島根県教育委員会「中国横断自動車道広島浜田線建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ」では「桜尾城跡」として調査報告がなされているが、「瑞穂町遺跡分布図」では「高城跡」として周知されている。



第１図　赤城跡付近遺跡分布図（1:25000）

1．赤城跡
2．白鹿城跡
3．毛城跡
4．信友城跡
5．二ツ山城跡
6．本城跡
7．副城跡
8．道ケ谷Ｂ遺跡
9．コオギヤスミ窯跡
10．ロクロ谷遺跡
11．矢ケ谷窯跡
12．後友鈩跡
13．後友大鍛冶屋跡
14．上菅窯跡
15．定入遺跡
16．定入窯跡
17．桜ケ谷窯跡
18．カニケ迫遺跡
19．馬場ケ谷窯跡
20．馬場ヶ谷Ａ遺跡
21．馬場ヶ谷Ｂ遺跡
22．清水ヶ尻遺跡
23．清水ヶ尻窯跡
24．永明寺跡
25．鈩迫鈩跡
26．増屋横穴墓
27．南古墳群
28．長尾原遺跡
29．御華山古墳群
30．竹前遺跡
31．鱒渕古墳群
32．原下遺跡
33．淀田古墳群
34．石井ヶ迫窯跡
35．オノ神瓦窯跡
36．大西瓦窯跡
37．蛇池遺跡
38．小絵堂遺跡
39．オセド遺跡
40．福音寺遺跡
41．高見屋横瓦窯跡
42．淀原遺跡
43．若林遺跡
44．板屋裏瓦窯跡
45．江迫横穴墓群
46．沢陸遺跡
47．秋広瓦窯跡
48．淀原古墳
49．前曽根瓦窯跡
50．旅行村グラウンド窯跡
51．鉄穴内遺跡
52．小谷遺跡
53．川ノ免遺跡
54．滑遺跡
55．狼原上遺跡
56．狼原鈩跡
57．狼原遺跡
58．大畑瓦窯跡
59．七神社社務所裏石棺墓群
60．宮ヶ谷遺跡
61．阿弥陀堂遺跡
62．榎谷遺跡
63．宇山Ｂ遺跡
64．宇山窯跡
65．宇山Ａ遺跡
66．鉄穴原鈩跡

Ⅲ．調査の概要

赤城跡は小規模な郭群からなる中世の山城跡である。調査地は主郭と推定される頂上から北東へ派生する尾根上に所在する平坦面と、そこから北西約30mの急斜面に位置する竪堀状遺構の調査を実施した。平坦面の調査は林道工事で影響を受ける東西約20m南北約18mの範囲で365㎡の範囲を、溝状遺構は北東11m南西4.5mの範囲で面積50㎡を発掘調査した。

検出した平坦面は便宜上調査区内最高地点から順次第１平坦面から第４平坦面と呼称し、調査に先立って尾根中央部を南北に幅50cmのセクションベルトを設定した。また、竪堀状遺構は調査区のほぼ中央部を横断方向にセクションベルトを設定した。

10～20cmの表土を除去すると簡略に整地された平坦面を検出したが、柵列や建物跡等は検出できなかった。竪堀遺構も地山をわずかに掘り込んだ簡略なものであった。出土遺物は、第３平坦面で２点、竪堀状遺構で１点陶器片が出土した。次に各平坦面や竪堀状遺構等について概要を述べておきたい。

１．第１平坦面（第３・４図・図版第１c～２c）

第１平坦面は標高512.4mの主郭からの比高差約27mの標高485mに位置する。平面形はやや不規則な四辺形を呈しており、東西約９m、南北約３mの規模で面積は17.2㎡である。北側の斜面を29°の角度で削り出している。土層は地山直上から暗黄褐色土（炭化物を含む）、茶褐色土（盛土）、淡黄褐土、表土となり、南側に向かって20～50cmの厚さの盛土により平坦面が拡張されている。平坦面は縁辺部に向かってわずかに傾斜しており、第２平坦面との間の平均斜面は35°の斜度である。

２．第２平坦面（第３・４図・図版第１c．２a．３a．４a）

第１平坦面の南側約７mに位置し、第１平坦面からの比高差約4.6mである。平面形は細長い三日月状を呈し、東西約11m、南北約２mの規模で面積は20.6㎡である。第１平坦面同様北側を36°の角度で削り出し尾根筋方向に盛土している。土層は地山、明黄褐色土（盛土）、淡黄褐色土、表土となり、南側に向かって10～45cmの厚さで31°の斜度で盛土し平坦面を造成している。用途は不明であるが人頭大の河原石が１点出土している。

３．第３平坦面（第３・４図・図版第１c．２a．３b～４a）

第２平坦面の南側直下に造られた本調査区で最も小規模な平坦面で、尾根筋方向に盛土し平坦面を確保している。規模は東西約７m、南北約１mで比高差約0.9m、面積は9.1㎡である。平面形は不規則な長方形を呈し第４平坦面への斜度は28°である。土層は地山、濃茶褐色土（盛土）、淡黄茶褐色土、表土となり、盛土の厚さは10～30cmである。平坦面西側端部付近で備前焼すり鉢の口縁部１点、同甕の胴部の小片１点が出土した。

４．第４平坦面（第３・４図・図版第１c．２a．４b～５a）

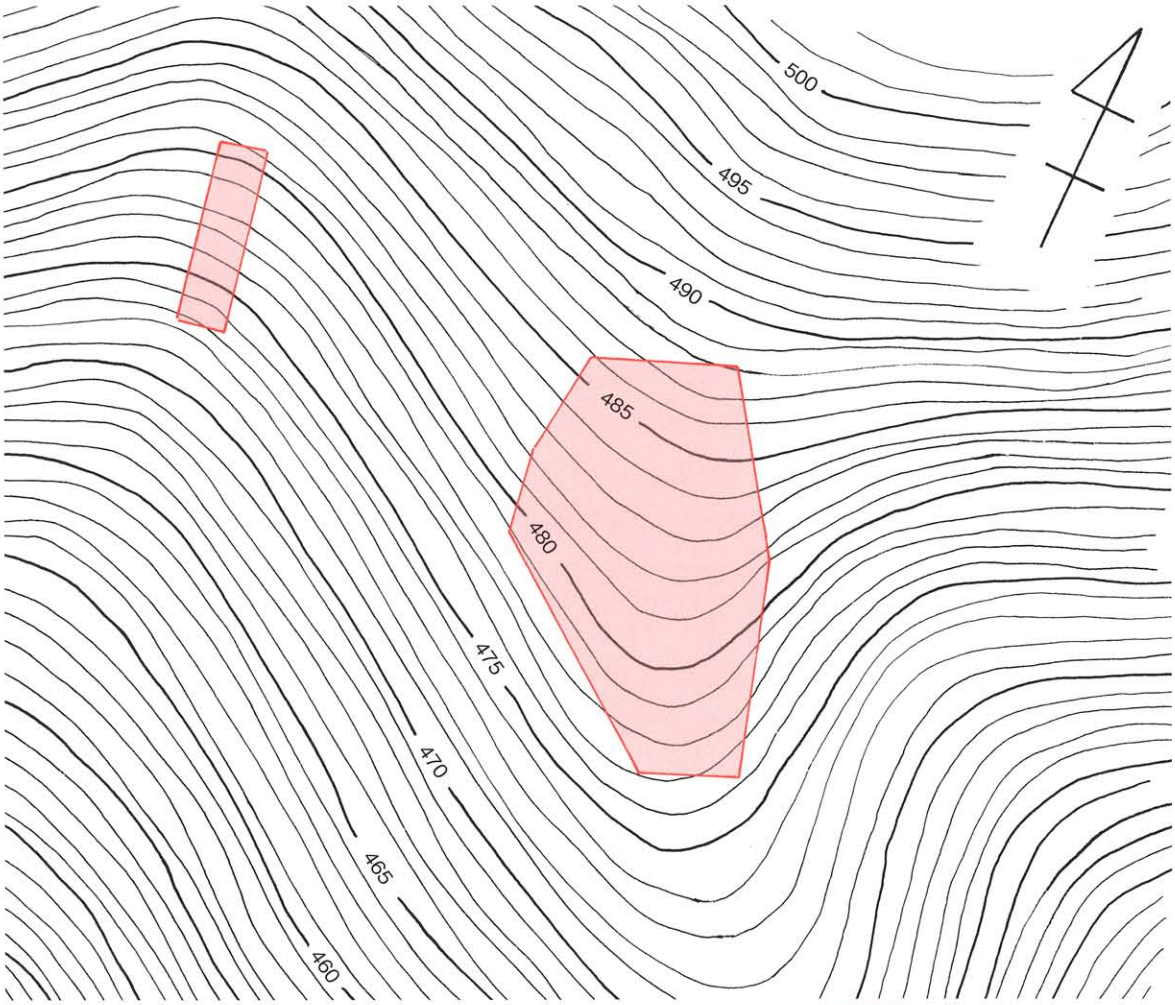
第３平坦面南側直下に造られ、第３平坦面との比高差は約0.9mで、尾根方向に盛土して平坦面を確保している。平面形は半月状を呈し、規模は東西約８m、南北約1.5m、面積は13.3㎡である。土層は地山直上に10～20cmの厚さで茶褐色土、暗褐色土、明黄褐色土を敷き均し、その上に10～30cmの厚さで濃茶褐色土を敷き均し盛土している。

5．竪堀状遺構（第５図．図版第５b）

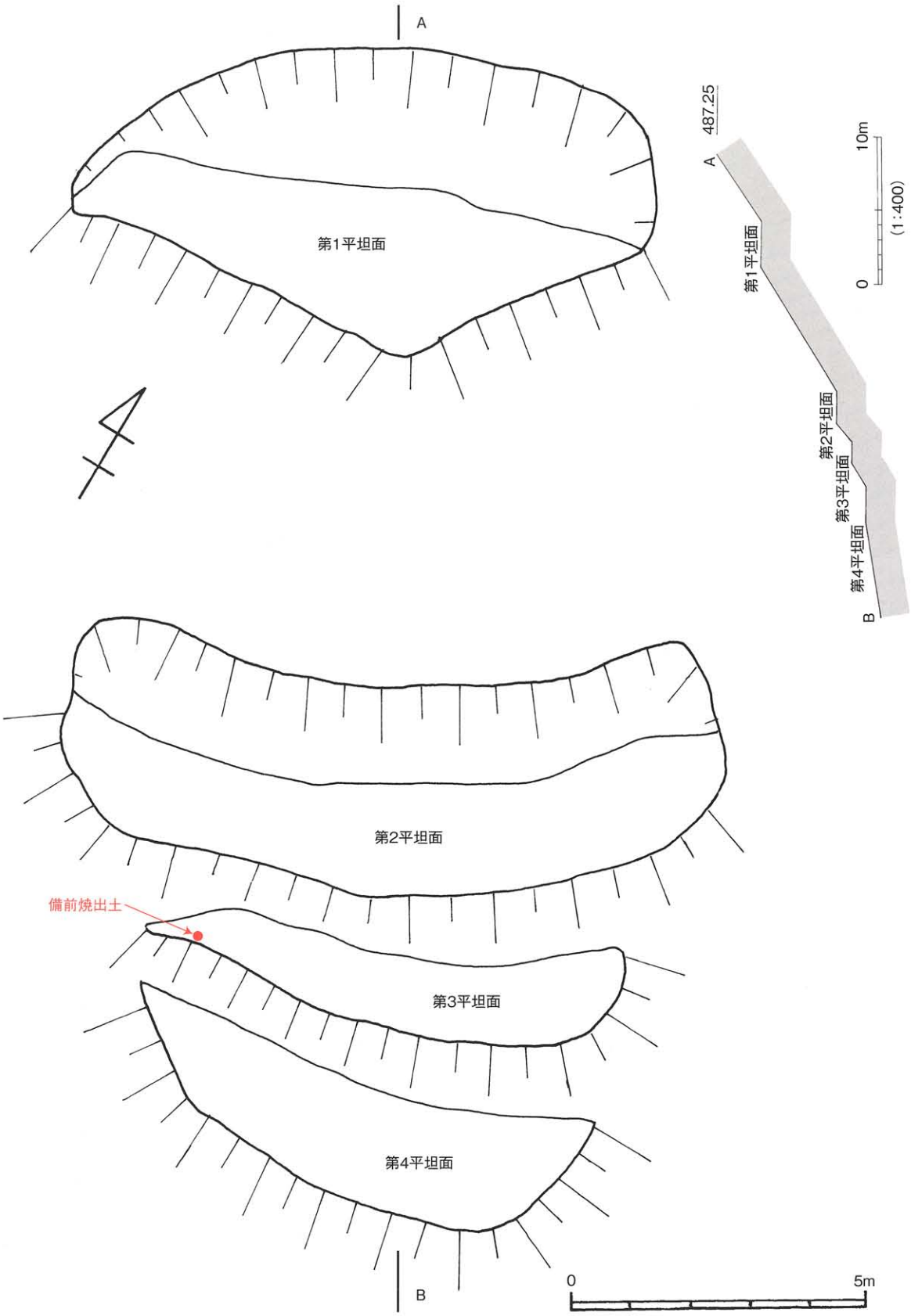
平坦面群から西へ約30mに所に位置する。遺構の規模は表面観察で調査区から上方向に約16m下方向に約20m続いており全体では約47mの規模と推定される。付近には外に竪堀状の遺構は見当らない。検出した遺構は幅約1.7～約2.2mで深さ約80cmである。底部はすり鉢状に丸く掘り込まれており、調査区中央付近の底部より陶器片が１点出土した。なお、遺構の両側に盛土等は認められない。

6．出土遺物（第６図．図版第５c）

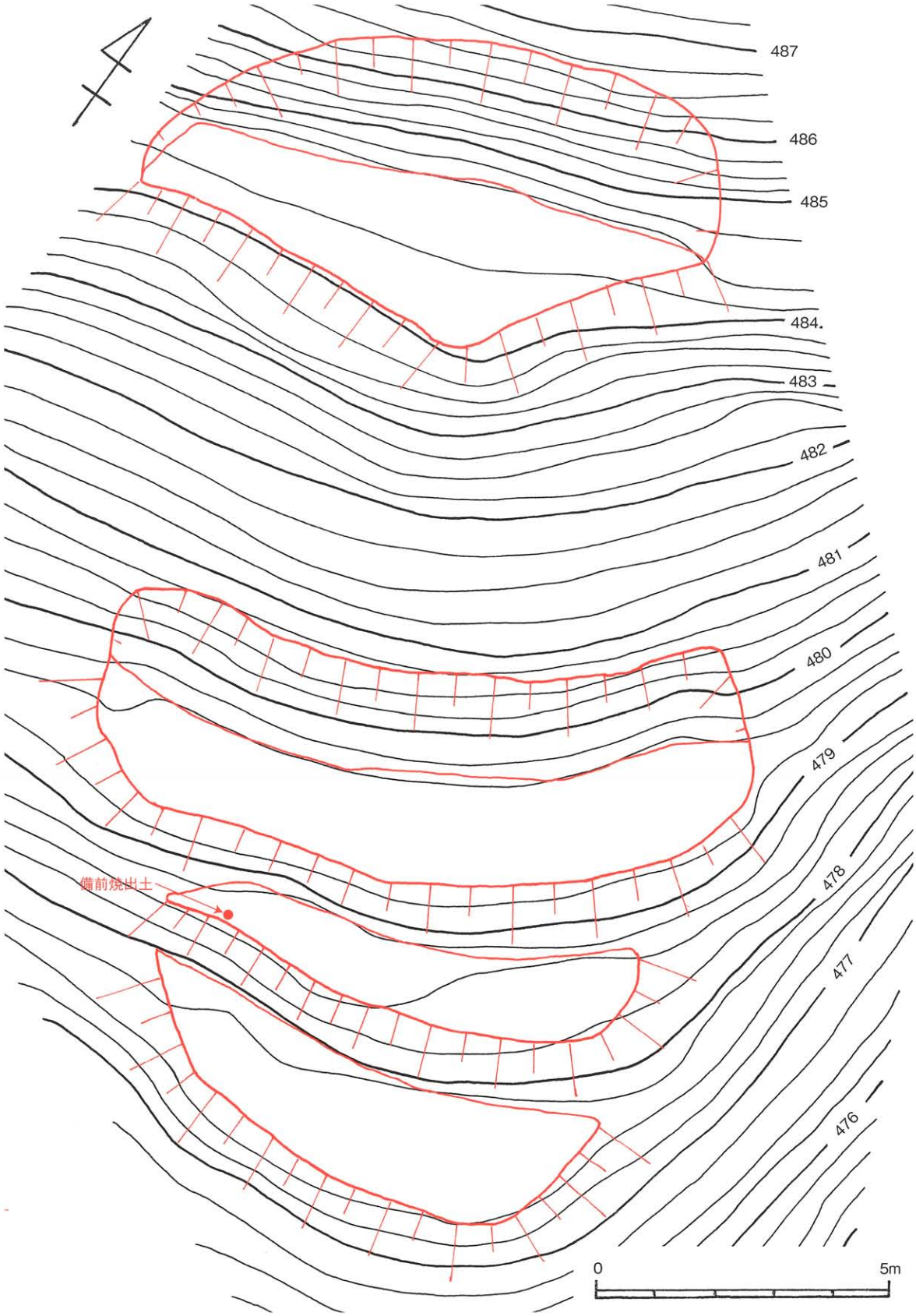
第３平坦面で備前焼の陶器片２点、竪堀状遺構底部より陶器片１点が出土した。１は備前焼のすり鉢である。口径は28cmで体部は直線的に立上り口縁は上下に拡張し端部は丸くおさめられている。色調は外面口縁部が青灰色、体部が赤褐色、内面はそれぞれ茶褐色である。焼成は良好で胎土には１～３㎜程度の砂粒が含まれている。時期は口縁部の特徴から備前焼編年Ⅳ期後半（15世紀後半）であろう。２は備前焼の甕と推定され器壁厚は1.2㎜で色調は茶褐色、胎土は密である。時期は１のすり鉢と同じⅣ期後半と思われる。３は輸入陶器と推定される褐釉陶器である。器壁は４㎜で外面は黒褐色、内面は灰褐色、胎土は密である。小片のため器種は不明であるが「袋物」と思われる。



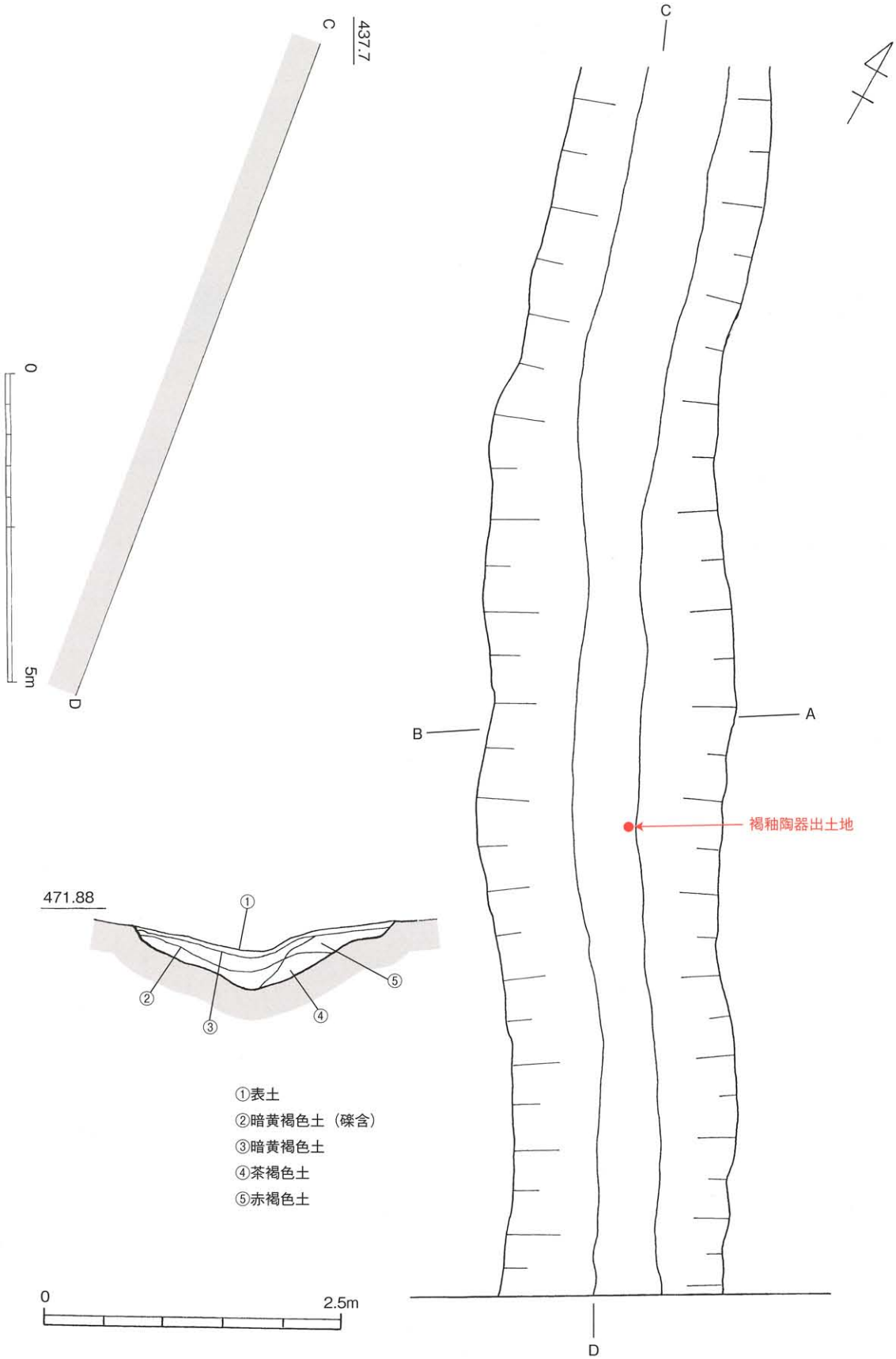
第２図　発掘調査前地形測量図・調査区設定図（1:500）　調査区



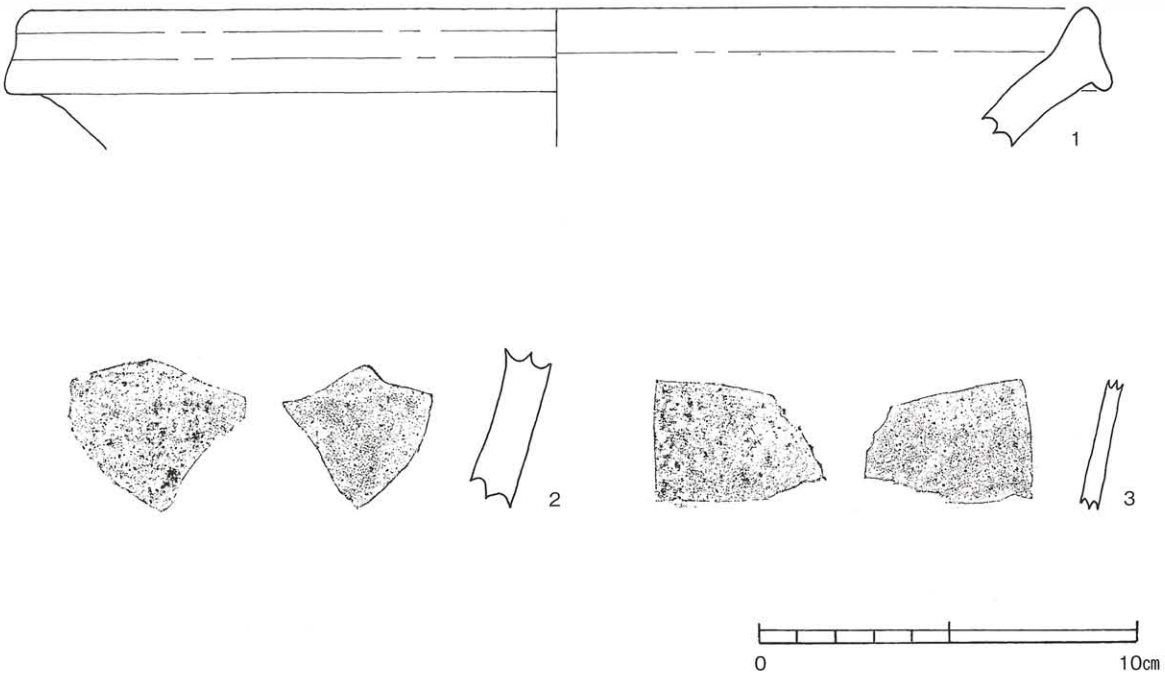
第３図　第１・２・３・４平坦面実測図（1:100）



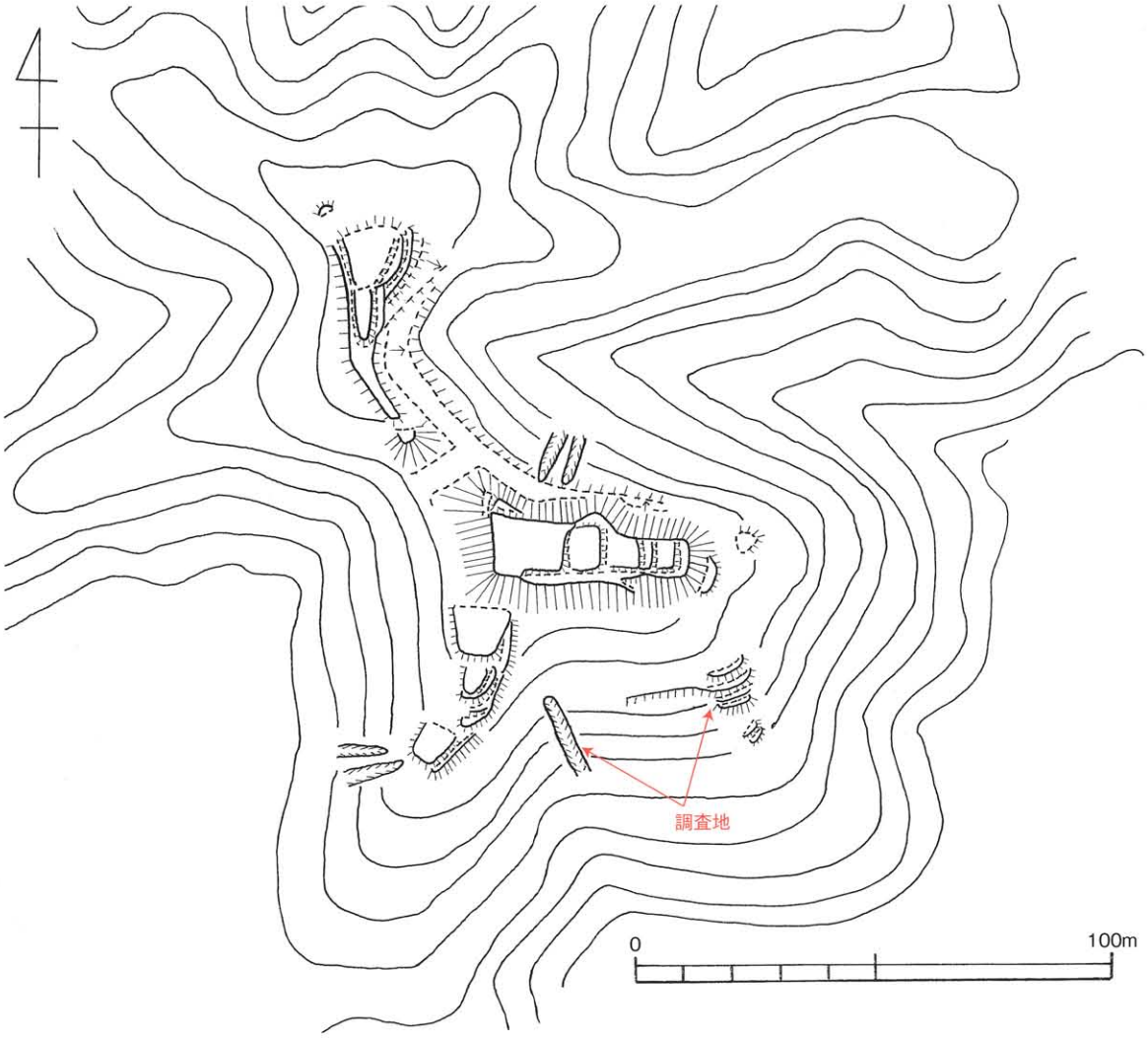
第４図　発掘調査後地形測量図（1:100）



第５図　竪堀状遺構実測図（1:50）



第６図　出土遺物実測図（1:2）



第７図　赤城跡縄張図（吉川正氏原図一部加筆）

Ⅳ．まとめ

今回発掘調査を実施した赤城跡は、中世の豪族出羽氏関係の山城跡と伝えられているが、それを証明する文献等の資料は見当らない。また、調査地が主郭部分から派生する尾根上の限られた範囲であったので、山城の規模や構造の全容を明らかにすることができなかった。事前の分布調査や発掘調査の結果からも常時大規模な兵力が駐屯した「本城」や「陣城」とは考えられず小規模な見張り所や砦跡と言えよう。

現在、瑞穂町内には、32ケ所の山城跡や砦跡が確認されている[(1)]が、その他にも砦跡や山城跡と伝えられているものが数ケ所分布している。それらの多くは未調査であり、文献からの検証も進んでいないため、築城者や築城年代についても明らかにされていない。このため瑞穂町域における中世武士団の動向についても不明である。したがって赤城跡の築城者（居住者）、さらに政治的動向の中での位置ずけについては、今後の調査、研究の進展を待って改めて検討する必要があるが、ここでは、今回の発掘調査によって得られた資料をもとに、赤城跡の構造や性格についてまとめておきたい。

文献からみた赤城跡

『石見誌[(2)]』によると、赤城城主は出羽小次郎と記載されている。この出羽小次郎について同書は「大判氏族、富永義祐廿一世出羽祐直（祖先出羽ニ居リ氏トス）小次郎ハ此ノ支族」とある。出羽小次郎についても原資料が明らかではないが、出羽祐直は『萩藩閥閲録』集録「出羽家文書[(3)]」に応永年間中の文書が３通残されており、14世紀末から15世紀初頭に実在した人物であることは確認できる。出羽小次郎は祐直の支族とされているので、おそらく15世紀前半以降の人物であろうと考えられる。

ところで、出羽氏は元は富永氏と称し、その出自は滋賀県北部の富永荘と言われ、治承４（1180）年平氏により久永荘（瑞穂町周辺）に流配になった富永祐純が土着したのが始まりだと伝えられている。祐純以降の系譜は不明な点が多く、資料的に確認できるのは貞和４（1348）年の出羽実祐の軍忠状が初見である。また、赤城築城について『瑞穂町誌[(4)]』は「正平16（1361）年南朝方に転じた阿須那の高橋氏に、居城二ツ山城を攻略され、出羽氏は上下出羽郷700貫の地を失い、邑智町君谷周辺をわずかに領有するだけとなった。明徳３（1392）年南北朝合一後、大内氏の斡旋で高橋氏と和睦し、250貫の地を返還され瑞穂町宇山（高原）に居住し、隣接する高橋氏に備えて、周囲に赤城や毛城、白鹿城等宇山城跡群を築いた」とされている。高橋氏の二ツ山城攻略や出羽氏との和睦については、「出羽家文書」等から信頼してもよいと考えられる。しかし、赤城の築城期については、原資料料が不明で検証することはできないが、出羽氏やその一族に関わりのある者の築城と言えそうである。

赤城跡の構造について

赤城跡は４つの郭群から構成されている。標高512.4mの郭群を中心に北東、南、南東に派生する尾根上に小規模な郭群を配置している。中心部は５つの郭からなり、最高所に約12×15mの郭を設け、それに続く西方向に約10×７m程度の規模の郭を配置している。郭群の面積は約500㎡である。中心郭群と堀底まで比高差約６mの堀切で区切られている北西郭群は２～３の郭で構成され面

積は約300㎡である。南側郭群は５つ以上の郭で構成されているが、中心部郭群からの比高約10mに位置する約150㎡の台形状の郭から尾根筋に沿って小規模な郭が設けられている。郭群の面積は約250㎡である。これらの郭群は、中心部郭群と比べ極めて簡略で郭間の段差も明瞭でない。今回発掘調査を実施した南東郭群は小規模な４つの平坦面からなり面積は約60㎡である。調査では建物跡や柵列などは検出されていない。また防備施設である竪堀も中心郭群の北側へ小規模なものが２条、南側へ１条、南西に２条認められるだけである。この他、中心部郭の北東尾根上にも小規模な平坦面が認められるが詳細は不明である。また、本山城跡は出羽地区や高原地区集落から離れた山間の地にあり在地支配の機能を有した城とは言えないが、全体の縄張から南東部の出羽盆地を意識している山城と思われる。

以上のことから赤城跡は１．数状の竪堀と堀切が認められるだけで防備機能が低い山城である。２．在地支配の機能を有した城とは言えないが、南東方向を意識して造られた山城である。３．郭群の規模も小さく常時大規模な兵力が駐屯した「本城」や「陣城」ではなく、簡略に造られた見張り所や砦のような山城であるといえる。しかし、付近には出羽氏関連の城跡群と伝えられる宇山城跡群が所在しているので、それらとのつながりの中で城跡の性格について、今後検討する必要があろう。

赤城跡の築城年代について

今回の調査区内第１平坦面の断ち割調査で、地山と盛土の間で検出した炭化物の放射性炭素年代測定（14C）の結果等から、概ね13世紀後半から14世紀前半にかけての築城と推定される。

河瀬氏は中世山城の型式を分布調査や発掘調査の資料をもとにⅠ土居型式、Ⅱ山城型式、Ⅲ沼田城型式、Ⅳ水軍城型式、Ⅴ平城型式に分類さている。さらにⅡ山城型式は自然の山を削平したり、掘り切ったりして構築し、菩提寺、居館などを山麓に設けるもの（Ⅱ－ａ）と、石垣や石積みを採用したり、菩提寺や居館などの城館を山上に設けるようになってきたもの（Ⅱ－ｂ）二つに分類され、時期的には、Ⅱ－ａとしたものは、領主としての勢力が伸長し、領主間の争いが活発化する室町期になって築かれたものが大半で、Ⅱ－ｂとしたものは領主間の戦闘が激化し、恒常化する戦国期になって現れる城で、防御のための郭や施設が増え、石垣なども多く採用され、城として堅固な構造になってくるとされている[(5)]。赤城跡は山城型式のⅡ－ａに最も近く、放射性炭素年代測定の数値から推定される年代と大きく矛盾しない。これらのことから、赤城跡は出羽氏やその一族によって13世紀後半から14世紀前半に築城され、出土遺物等から15世紀後半頃も山城として機能していたと考えられる。

註

(1) 瑞穂町教育委員会 「瑞穂町遺跡分布図Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ」 1985. 1989. 1990. 1991年。
(2) 天津亘 「石見誌」 1925年。
(3) 「萩藩閥閲禄」「第43出羽源八」。
(4) 三上鎮博 「瑞穂町誌第１集」 瑞穂町教育委員会 1964年。
(5) 河瀬正利 「広島県における中世山城跡について」「芸備地方史研究」第110. 111合併号 1997年。

付編 1

島根県瑞穂町教育委員会　　様　　(株)地球科学研究所

放射性炭素年代測定結果報告書

放射性炭素年代測定の依頼を受けました試料について、別表の結果を得ましたのでご報告申し上げます。

報告内容の説明

14C age (y BP) ： 14C 年代測定値
試料の 14C／ 12C 比から、単純に現在(1950年AD)から何年前(BP)かを計算した年代。
半減期として5568年を用いた。

補正14C age (y BP) ： 補正 14C 年代値
試料の炭素安定同位体比(13C／ 12C)を測定して試料の炭素の同位体分別を知り
14C／ 12C の測定値に補正値を加えた上で、算出した年代。

δ 13C (permil) ： 試料の測定 14C／ 12C 比を補正するための 13C／ 12C 比。
この安定同位体比は、下式のように標準物質(PDB)の同位体比からの千分偏差(‰)
で表現する。

$$\delta\ 13C\ (‰) = \frac{(13C/12C)[試料] - (13C/12C)[標準]}{(13C/12C)[標準]} \times 1000$$

ここで、 13C／ 12C [標準] = 0.0112372である。

暦 年 代 ： 過去の宇宙線強度の変動による大気中14C 濃度の変動に対する補正により、暦年代を算出する。　具体的には年代既知の樹木年輪の 14C の測定、サンゴのU-Th年代と 14 C年代の比較により、補正曲線を作成し、暦年代を算出する。 最新のデータベース("INTCAL98 Radiocarbon Age Calibration" Stuiver et al, 1998, Radiocarbon 40(3)) により約19000年までの換算が可能となった。*

*但し、10000yBP以前のデータはまだ不完全であり今後も改善される可能性が高いので、補正前のデータの保管を推奨します。

測定方法などに関するデータ

測定方法　**AMS** ： 加速器質量分析

Radiometric ： 液体シンチレーションカウンタによるβ-線計数法

処理・調製・その他 ： 試料の前処理、調製などの情報

前処理　acid-alkali-acid ： 酸 - アルカリ - 酸洗浄
acid washes ： 酸洗浄
acid etch ： 酸によるエッチング
none ： 未処理

調製、その他

Bulk-Low Carbon Material ： 低濃度有機物処理
Bone Collagen Extraction ： 骨、歯などのコラーゲン抽出
Cellulose Extraction ： 木材のセルローズ抽出

Extended Counting ： Radiometric による測定の際、測定時間を延長する

分析機関 ： BETA ANALYTIC INC.
4985 SW 74 Court, Miami, Fl.33155, U.S.A

Radiocarbon Dating Report　　Geo Science Laboratory

C14年代測定結果

島根県瑞穂町教育委員会　様　　950001

試料データ	C14年代(y BP) (Measured C14 age)	δ13C(permil)	補正 C14年代(y BP) (Conventional C14 age)
Beta- 89806	770 ± 60	-28.3	720 ± 60

試料名（　2000）　赤城跡

測定方法、期間　radiometric-PRIORITY

試料種、前処理など　charred material　　acid-alkali-acid

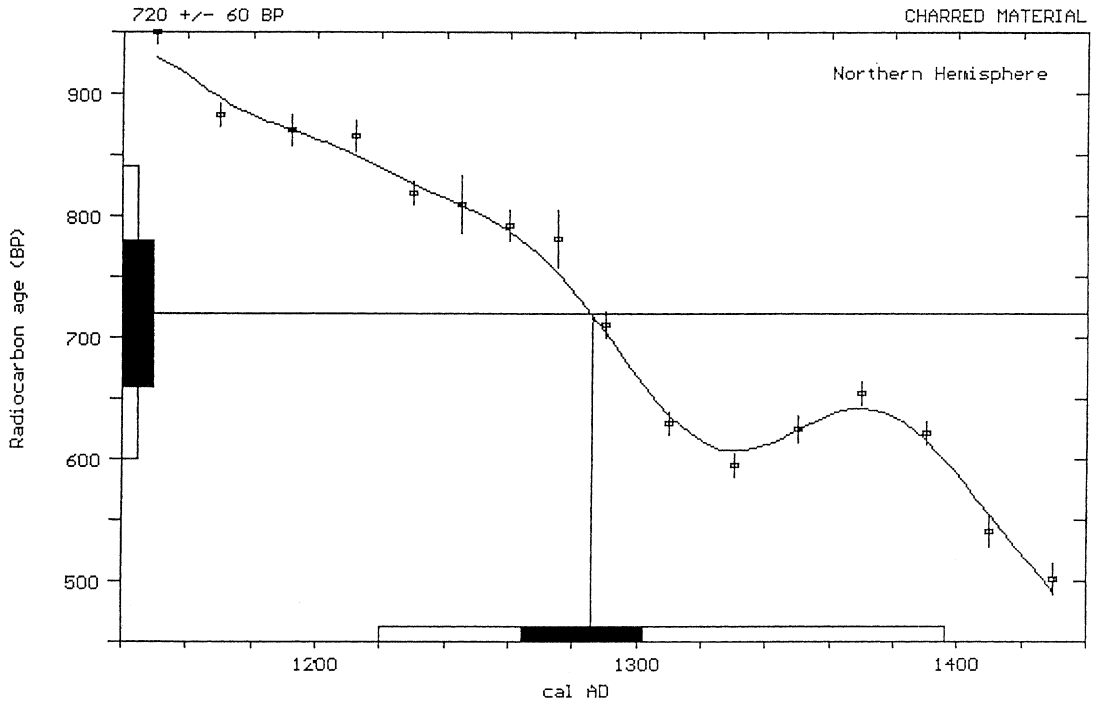
CALIBRATION OF RADIOCARBON AGE TO CALENDAR YEARS

(Variables:C13/C12=-28.3:lab mult.=1)

Laboratory Number:	Beta-89806
Conventional radiocarbon age:	**720 +/- 60 BP**
Calibrated results: **(2 sigma, 95% probability)**	**cal AD 1220 to 1395**

Intercept data:

Intercept of radiocarbon age with calibration curve:	cal AD 1285
1 sigma calibrated results: (68% probability)	cal AD 1265 to 1300



References:

Pretoria Calibration Curve for Short Lived Samples
Vogel, J. C., Fuls, A., Visser, E. and Becker, B., 1993, Radiocarbon 35(1), p73-86

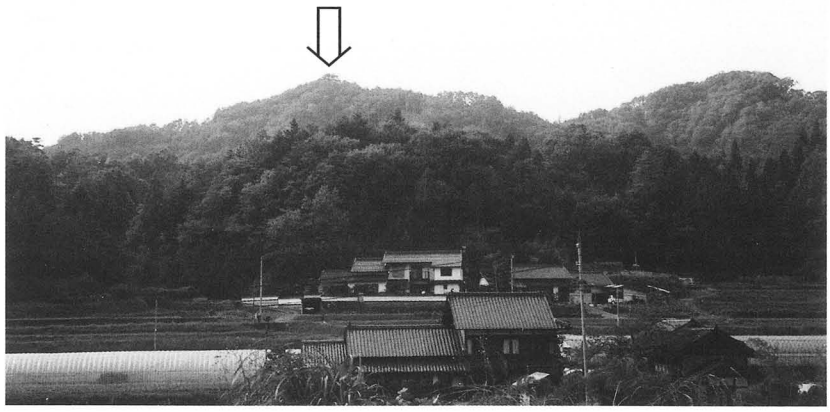
A Simplified Approach to Calibrating C14 Dates
Talma, A. S. and Vogel, J. C., 1993, Radiocarbon 35(2), p317-322

Calibration - 1993
Stuiver, M., Long, A., Kra, R. S. and Devine, J. M., 1993, Radiocarbon 35(1)

Beta Analytic Radiocarbon Dating Laboratory

4985 S.W. 74th Court, Miami, Florida 33155 ■ Tel: (305)667-5167 ■ Fax: (305)663-0964 ■ E-mail: beta@analytic.win.net

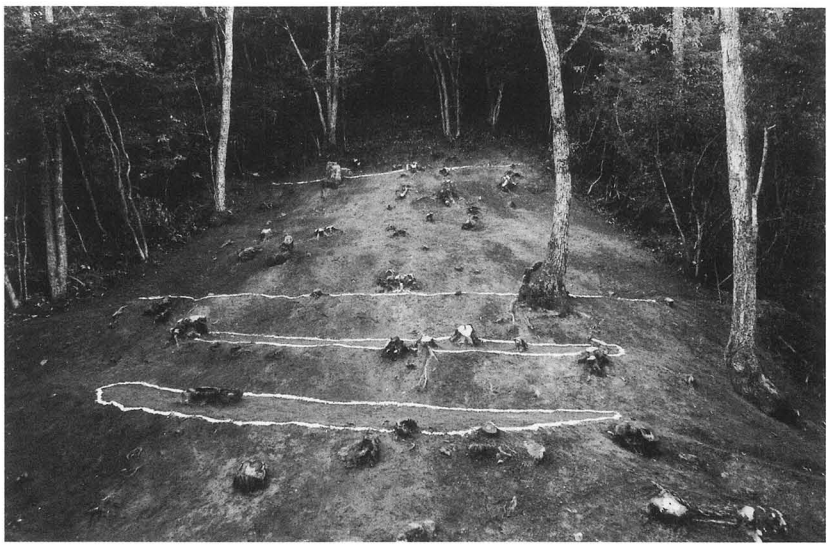
図　　版



a．赤城跡遠景
（南東から）

b．調査前全景
（北西から）

c．同完掘状況
（同）

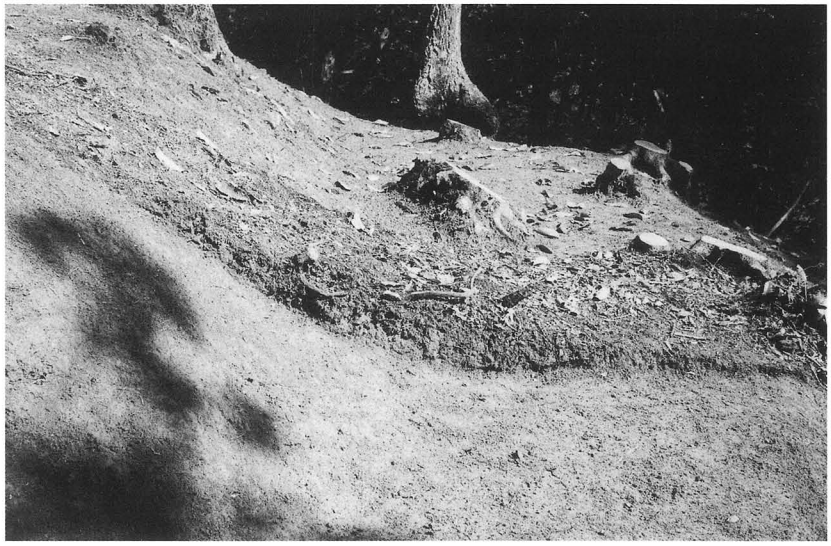


a．完掘状況
（南東から）

b．第１平坦面完掘状況
（南西から）

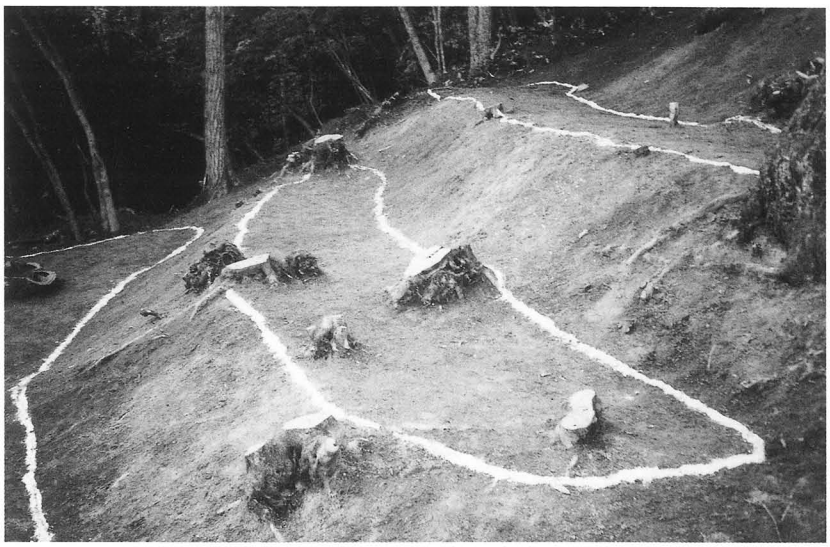
c．同
（北東から）

a．第２平坦面完掘状況
（東から）



b．第３平坦面土砂
堆積状況（西から）

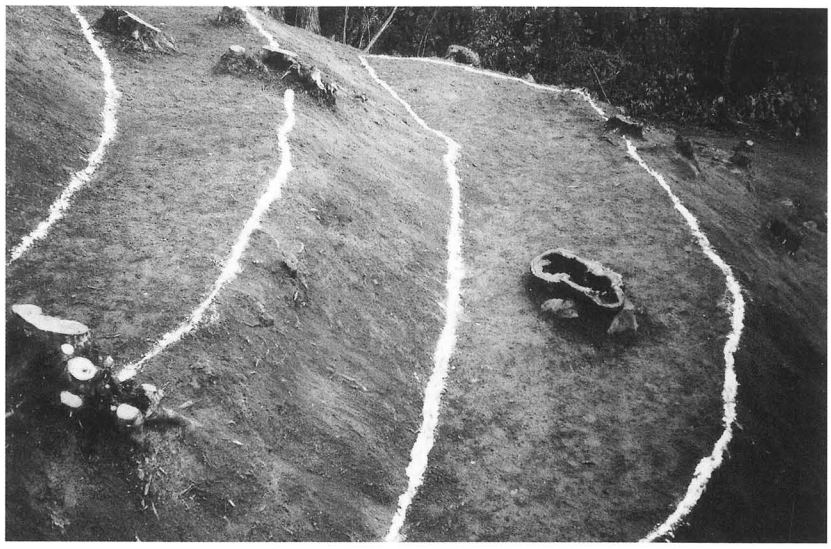
c．第３平坦面完掘状況
（東から）



a．第２・第３平坦面
完掘状況（東から）

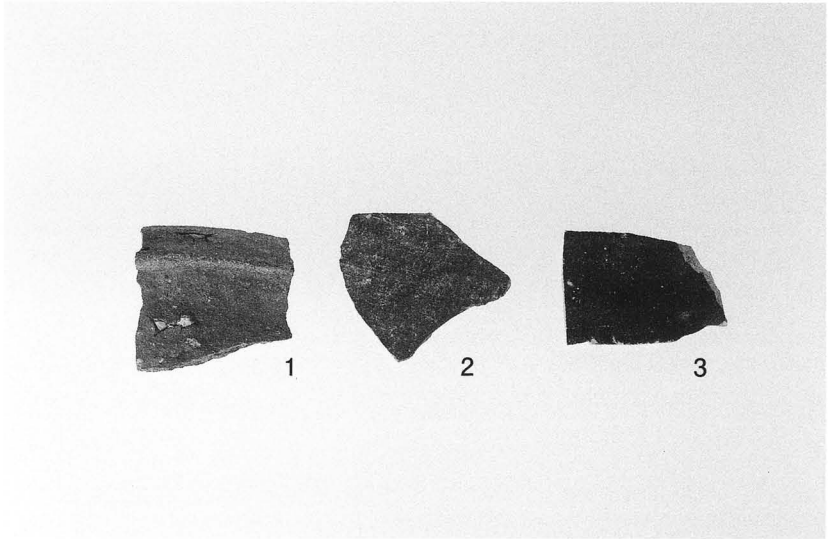
b．第４平坦面土砂
堆積状況（南西から）

c．同完掘状況
（同）



a．第３平坦面・第４平坦面
完掘状況（西から）

b．竪堀状遺構完掘状況
（北西から）



c．出土遺物

報告書抄録

ふりがな	あかじょうあとはっくつちょうさほうこくしょ
書名	赤城跡発掘調査報告書
副書名	林道栃谷線新設工事に伴う発掘調査報告書
巻次	瑞穂町埋蔵文化財調査報告書第19集
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	森岡弘典
編集機関	瑞穂町教育委員会
所在地	〒696-03　島根県邑智郡瑞穂町大字三日市32番地
発行年月日	西暦　1998年３月

所収遺跡名	所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積㎡	調査原因
赤城跡（あかじょうあと）	島根県邑智郡瑞穂町（しまねおおちみずほ） 大字上原字大廻（おおあざかみはらおおまわり） 331番外	32445		34度 51分 44秒	132度 32分 15秒	19971017 ～19971031	365	林道工事

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
赤城跡	城館跡	中世	削平地４ 竪堀状遺構	備前焼 褐釉陶器	

平成８(1996)年３月

島根県邑智郡瑞穂町

赤城跡発掘調査報告書

編集・発行　島根県邑智郡瑞穂町教育委員会
印　　刷　柏村印刷株式会社